「政治とマスコミ（テレビ）」を担当して

日下　雄一

昨年（2003年4月）から今年（2004年1月）にかけて，およそ1年間で，前後期2単位ずつの“全カリ”の授業を終えて，今，採点の作業に入っているところです。前期に続いて，後期は，400名以上の学生が授業を受けてくれた様で，今その答案用紙を前にこれから数日続くであろう，採点の難作業に思いを馳せ，少し気を重くしているところです。

いきなり愚痴になって恐縮だが，実際，この採点（前期）という作業（大学の講師，まして採点という仕事など経験したことのない私にとっては），想像（もしていなかったのだが）を越えた難作業，大仕事でした。

思えば，そもそも，この“全カリ”の講師のお誘いをしてくださった立教大学の服部孝章教授から前期の試験が近づいた頃，試験問題については“よく検討しておいたほうがよいですよ，とりわけ論文形式は，採点が難しく学生から採点の是，非，について苦情がでることも考えられるので…なにより，時間をとられますから”と親切なアドバイスをいただいていたのだったが，何分，事情を知らない私は，あまり深く受け取らず，尚かつ無謀にも，最も手間のかかる論述形式を採用したのだった。前期の学生も400名近くだったが，果たして採点を始めてみて，服部教授の親切さが身に汲む事態となったのだが，既に後の祭りだった。1200字位の論述形式にしたのだが（2問のうち1問選択），1人，1200字として，400人で480,000字を読むことになり，採点をはじめてみて初めて，その作業の膨大さに，しばし立ち尽くすことになったのだった。

今回，後期は，これに懲りて同じ轍を踏むことは止めようと一度は考えたのだが，常に，仕事で後輩たちの文章力や作文力とまではいわないにしても，日本語のレベルの低下に苦情を言い，マスコミやジャーナリズムを志す以上，それらをきちんとやれ！といっている私としては，多少の作業の苦しさの為に楽をするのは，良心的ではないな？と誰も気にはしないのに，少し意地を張って，結局，後期も論述形式にしたのだった。結果，前期を上まわる学生が授業に出てくれ（このこと自

体は講師として大変嬉しく，支えにもなっていたのですが）たのですが，その結果が，今，私の自宅の仕事机の前で圧倒的な存在感となっているのです。膨大な答案の山は，私に，少しでも速く仕事に着手することを迫っている様です。そうしないと時間がどんどん経ち〆切に追われることになる。採点を始める前の重い空気が私の机には漂っているという訳です。

採点の作業に向かわせることを躊躇させる理由が実は，もう一つあります。それは，実は楽しみの一つでもあるのですが，答案を読み始めると，すいすいと機械的に読んで採点する気になれなくなるのです。一生懸命に書いている答案，あまり分かっていないな？と思う答案でも字がきれいで必死にいい答案にしようという気持ちがヒシヒシと伝わる筆跡を見ると，つい何とか点を上げてやろうという仏心がわいてきます。私は授業で必ず終わり5分程とって，ミニ感想用紙を配ります。それには何でもいいから授業の感想を書いてください，時間が無いとか，思い浮かばなかったら，内容について○とか×でもよいと伝えてあります。その際，名前の記入は無くても構わない，採点には入れないということも言ってあります。私は自分の授業を学生がどう受け入れてくれたか？学生の考え，授業への希望はなにか？について知り次の授業への参考にしたいからなのですが，この方法は多くの成果がありました。学生たちは実に真面目に，私の予想以上に熱心に，わずか5分の間とは思えない程，意見を書いてくれました。本当に○とか×だけの学生もいましたが，皆率直に感想を書いてくれました。大変参考になりました。とてもいい感想，意見をかいてくれた学生を思い出すと，何とか良い所を探してCならB，BならAにできないか？と考えてしまうのです。こうなると採点の作業は更に進み具合が遅くなります。しかし，これも又，すべて，私の成せる事なので，誰も，まして服部教授を恨むことなどできはしません。

いきなり脱線気味になってしまいましたが，話を本題に戻してみましょう。

この講座の講師を服部教授から依頼された時，大学生に何を教えられるのか？と一瞬躊躇を覚えました。私自身，大学時代，真面目な学生ではなかったし，優等生でもなかった。又，社会に出て特別勉強したり，研究を重ねたわけでもなかった。研究者の方や優秀な立大生の前で恥をかくのではないかと不安に思ったくらいです。もし，私に多少とも人に話せることがあるとすれば，入社以来，ずっと制作現場に拘り続け，結果として幸運にも？今の制作の現場にいるという長い（長いから良いものでもないが）経験があるだけです。服部教授は，それを見透かした様に，“日下さん，それでいいんですよ，現場の経験を，研究者や学生には経験

できない制作現場のことを話してくれればいいんですよ”と説得，半ば励ましてくれました。私も，それなら多少は何とかなるか？と少し安心し，こう考えてみました。テレビの制作は視聴者あってのものだし，長くテレビに関わった人間として，そこで得た経験，ノウハウを後輩に伝え，視聴者に還元することは大切なことではないか？大学の先生方や，研究者とは違った立場でテレビのことを直接学生に話すことも，制作者にとって大事な経験，何よりサービス・お返しかもしれない…と。そう考え，何を講義するかと考えた私に提案された大学からのテーマは，表題になった「政治とマスコミ（テレビ）」でした。私個人は，政治に限定するのは講義内容に選択の幅を狭めるのではないかということと，いわゆるマスコミの世界で言われる，政治に直接影響を与える（と思われている）テレビと政治に特化することで生硬な印象を与えるのではないかということが気になりました。私は政治も人間の営みの一つであり，人間と社会との関わり，人間とテレビ・マスコミの話を広い意味でしたいという気分が強かったからです。その考えを伝えると先生も大学もそれでよいというので，タイトル・テーマは表記の通りとしました。

具体的に何を教えるか？前期・後期各12回ずつで内容は，ほぼ同じでよいというので12回分のシラバス〈講義要録〉を早速作成することにしたのですが時間はあまりありませんでした。いろいろと考えましたが，先述したように私ができることは限られていました。テレビ・メディアの制作，とりわけ報道制作の現場で見たり感じたことを伝えること，という観点から考えると，中心となるべきテーマは自ずと絞られてきました。現場の経験を基にテレビとは何か？番組は，どうやってできるのか？プロデューサー，ディレクター，記者やキャスターの役割，そして彼らは何を考えているのか？こられのことを学生に話し，視聴者でもある学生から意見を聞き，制作にフィード・バックしたい…ということです。そして何より，この12回の講義を通じて，学生がテレビやマスコミというものについて関心を持ち，その後の学生生活を送るうえでささやかでも参考になってくれればいいということでした。何も大層な学問を教えるわけでもないし，格好をつけた理論や体系を話す必要もない。そう思うと12回のシラバスは自然に出てきたのでした。その内容をタイトル風につけたのが次ぎの講義表です。

①テレビとは何か？テレビ論序説
②テレビ・キャスター論
③北朝鮮報道はこれでいいのか？
④テレビ報道番組はどのように作られるのか？
⑤テレビは本当に真実を伝えているか？

⑥テレビと政治の危険な関係
⑦テレビは政治（権力）を変えたか？
⑧テレビ・ジャーナリズムの中立性について
⑨テレビと活字メディア（新聞，雑誌）の違い
⑩テレビ報道と公権力の介入の歴史
⑪報道の自由とメディア規制について
⑫多チャンネル時代のテレビ

とりあえずまとめ大学に提出した私の考えた12回分の講義スケジュールです。何より理論を教えることより，テレビ・メディア，ジャーナリズムに興味と関心を持ってもらうことを一義的に考えた結果でした。

後期も基本的考え方は同じでしたが，今を伝えるテレビ・メディアとして当然，前期から半年経った時点での講義となることを考え，一部，変更したり，内容を手直しをしたテーマもありました。例えば，3回目の北朝鮮報道はこれでいいのか？は，4月30日の予定でしたが，後期の3回目では10月8日になる。動きの速い現代でしかも，その最たるメディアの代表とされているテレビ報道で半年前後の時の経過は無視できない。そのままやれば，かなり違和感を生むことは容易に想像できるし，できなければ，テレビプロデューサーなど勤まりません。そんな感度の持ち主なら即刻プロデューサーは首です。そうしたタイミング，ニュースの動きに合わせて，適時，具体的なテーマは変えていきました。

例えば後期の5回目は10月22日だったが予定を変えて，急遽，“テレビ朝日のダイオキシン報道裁判の最高裁判決”を中心に話し，学生達の意見を求めました。前週の15日に，この件につき最高裁判決が出ており，新聞等でも大きく扱われていたし，何より私がテレビ朝日に所属しているからというだけではなく，このニュースはマスコミ，とりわけテレビ・ジャーナリズムにとって大きな問題と思ったからでした。学生からも意見のメモを提出してもらいましたが，大変，参考になりました。これに近いことはその後の講義でも何度か行い，学生にも，そのアドリブ的（即興的）取り上げ方に興味を持ってくれた様でした。例えば，総選挙直後の7回目，11月12日の授業では“政治とテレビ・メディア”というテーマだったので，民主党のマニフェスト戦略を中心に話しましたが，反応は良かった様でした。選挙翌日の新聞大手5紙の一面見出しの違い（朝日・毎日の民主躍進…民主中心のそれと，読売，産経の与党現状維持…の表現等），具体的に比べて見せることで多くの学生達は，新聞が社によって考え方が違うことを始めて知った様でした。

こうしたタイムリーで，かつ具体的な題材の取り上げ方には私が予測した以上に，学生には興味が持てた様で，

授業を進めていくうえでも参考になりました。多分，大学で理論や難解な解釈をマスターする様に求められることが多い学生には，新鮮に思えたのかもしれません。私自身は大学の講義で“ポピュラー”なテーマを私の解釈で話してもよいものかとためらう気もあったのですが，本講義の趣旨からいえばよかったのかなとも思っています。

学生に興味と関心をもってもらい，テレビ・ジャーナリズムの理解を深めてもらうということでいえば，私がなにより考えたのは，現場の声を学生に聞かせるということでした。

そのために，幸い前後期各２名までゲスト・スピーカーを招くことができると聞き，無理を承知で現役のキャスターの方々に私の代わりに講義をしていただくことにしました。前期には，鳥越俊太郎氏，田丸美寿々氏に，後期にはテレビ朝日の渡辺宜嗣アナウンサーと長野智子氏をお呼びして，経験談やご自身の人生観，ジャーナリズム観等についてお話していただいたのですが，いずれもさすがに一級の方々で，学生達の反応は圧倒的に好評で感想メモを読むと初めて実際のビッグに会い話しを聞けたということで強く印象に残ったようだ。机上の空論でない生のしかも日本を代表するキャスター達だから当然なのかもしれませんが，実際の経験ほど強いものはない，と改めて私も再認識させられ勉強にもなりました。果たして私は各氏らの何分の一も学生に強い印象を残せたのか？次に心配になったはこの事でした。思い出す度に後々の授業で緊張させられたし，冷汗ものであった。

次に学生の興味と関心を呼び，理解を深める，という主旨を具体的にする為に私が前後期を通して考えた授業方法の一つは，VTR を活用することでした。これは私の得意分野である（はずだ？），私がプロデュースした番組やニュース映像，ドキュメンタリー時には，田原総一朗，大谷昭宏，岡留安則氏（“噂の真相”発行人）等，現在を代表するジャーナリストの方々にインタビューしそのVTR を適時，授業に取り入れ，講義の助けとしました。これも又予想以上に学生に好評で多分，これまで机上で理解したり想像していたイメージとは違って具体的に映像で見せられたことで新鮮な感想をもった様でした。番組内容だけではなく，“カメラ・ワーク”によって番組の観方が違ってくるという様なことも VTR を見て実感として理解してくれたようで，これも又予想以上の反応でした。全体を通じて，当初，私の不安でした，自分の浅学を補う意味でも考えついたゲスト・スピーカーの招聘や VTR の活用でもあったのですが，私の思惑を超えて学生には好意的に受け取られたことが分かり，一番ホッとしたのは実は私だったのかもしれません。

テレビの影響力に最も気づかない人

間が実はテレビ人自身といわれますが，この事を或る意味で，再認識させられた気がしました。

こうした学生の反応は，授業を進めるうえで私の不安を軽減させる役割を果たしてくれました。当初，じっと，VTRを見ている学生の反応が面白いのか，つまらないのか分からず時折，不安にもなったものですが，メモ等でそれが好意的な反応と分かったときは，私もうれしくなりました。講義を始める前に知人に言われたことだが，学生がどの程度の関心と理解力，それに基礎知識（ジャーナリズムに限らず，社会常識や歴史，文学への）持っているのか分からず，当初はそれを探りながらの授業の進め方でした。

これについては様々な感想もありますが，よくわかった事は，時代が変わったということでした。例えば，第2次世界大戦は勿論，ベトナム戦争ですら学生にとっては歴史であり，全く実感が無いということでした。あるとき，終戦特別番組を作る中で若い人が太平洋戦争で日本とアメリカが戦ったことすら知らないということが分かり，私自身，ショックを受けたことがありますが，それが極端な話ではないことを実感しました。考えてみれば，あの湾岸戦争ですら，多くの学生にとっては幼い日の記憶なのですから。学生の無知（失礼！）を言う前に時代の流れを痛感させられたものでした。（しかし読書が大切という気持は変わりませんが。）

時代の流れといえば，学生の何人かが学生生活で読むべき本を教えてください…というので（授業の参考書は講義前に紹介していたのだが）考えて約10冊の本をプリントにして配りました。私の推薦の基準はなるべく実用書やアカデミックな分野の入門書でなく，読書の楽しみや考えるヒントになるようにというもので，文学やエッセー，評論等の中から選ぶことにしました。学生時代に直接的な結果を求める読書の仕方よりも，考える癖や感性を磨くことの方が後々の為にも役に立つという思いからでした。安価で手に入る名著に交え，必ずしもポピュラーではないものもあえて入れてみました。学生の反応を知りたいという気持ちもあったのですが，これについては残念ながら期待外れになりました。約10冊のうち，読んでいたのは一冊かせいぜい二冊，作者の名前を知らない学生も多くいました。原則，戦後の日本の作品を中心にしたのですが，読書が何よりも大切と教えられ，そう思ってすごした私の学生時代とは隔世の感があると実感させられました。メールや携帯電話のほか，情報源は多様で娯楽にも恵まれた今の時代に同じことを求めるのは，私の方が時代錯誤かもしれませんが…。しかし，また別の発見もありました。それは学生に対する社会通念が実はかなりいい加減ではないかということでした。授業中でも平気でし

ゃべり携帯電話で話し，メールをし，注意してもいうことを聞かず，少しもじっとしていない…，こうした今時の学生への常識を私に説明し，いかに大学で教えることが大変かを訓し，教えてくれる人々がいました。半ば，そうかなと覚悟し，教室に入ったのですが，その覚悟が変わるのに多くの時間は要りませんでした。この場合，良い意味でですが。それは，私が担当した学生の多くが熱心で真面目で，礼儀正しく，世間でいう常識とは外れていたからです。遅刻も途中に席を立つ学生も少なく，授業中おしゃべりする者もいなかった。私にとってうれしい誤算でした。むしろ，私の予想以上の熱意で，私の授業への後押しをしてくれたと思っています。

私事で，恐縮ですが前後期計24回，実質半年の間，自身一度も遅刻をせず（会社ではあり得ないことですが），教室に入り，時には時間を超過して学生の質問に答えてきたのは，多くの学生達の熱意に支えられたからだと思っています。

前期が終わっても，後期も単位に関係なく授業に来てくれる学生も何人かいましたし，ゼミをもってくれと大学に問合せる学生もいたそうです。社会通念や風評で判断してはいけないと，反省したことでした。

この授業を受けた学生が，将来，テレビやジャーナリズムを志し，いつか，私の講義が仕事に選んだ契機だったといわれれば，望外の幸せだと考えています。講義をとってくれた学生に，またいつか会ってみたい。私に貴重な体験をさせてくれた多くの学生達に。

くさか　ゆういち
（2003年度全カリ兼任講師，
総合A群科目担当）